

言語療法部門 臨床指標

【目的】

当院 ST が実施した言語療法により、訓練前後で患者の障害された機能・能力がどのように変化したか、2024 年度の全体的な傾向を把握する。その結果から訓練内容の適否を判断し、足りない部分を補完し、次年度以降に提供する訓練の拡充を計る。一方で、効果が高かった点も把握し、次年度以降もより充実した形で訓練を実施できるようにする。

【方法】

「言語療法 患者台帳 2024 年度版」(以後、「患者台帳」) から、「失語症」・「運動障害性構音障害」・「摂食嚥下障害」の患者を抽出し、「軽度」「中等度」「重度」の群に分ける。「軽度」「中等度」「重度」は障害ごとに定義した。

対象を抽出する条件は、訓練開始時・終了時の両方で検査・評価を行うことができた患者とする。従って、何らかの理由で訓練開始時・終了時に検査・評価を行えなかった患者は対象から外す。基本情報として各障害の重症度群ごとに年齢と訓練日数の平均値を算出する。さらに訓練前後の機能・能力の変化を以下の評価項目で調べる。

1. 失語症： 「標準失語症検査 (以下、SLTA)」の「聞く」「話す」各合計点
「FIM 認知項目 (理解・表出)」
2. 摂食嚥下障害： 「摂食方法・食形態」

1. 失語症患者に対する訓練の効果判定

2024年度に失語症の訓練を行い、訓練開始時と訓練終了時に標準失語症検査（以下、SLTA）とFIMの認知項目（理解・表出）の評価を実施した患者について、理解障害・表出障害がどのように変化したかを重症度別に調べた。なお、外来の失語症患者（22名）は訓練頻度/期間が入院患者と大きく異なるため、本年度は効果判定対象から除外した。

失語症の重症度は理解障害・表出障害それぞれについて、訓練開始時のFIMの認知項目（理解・表出）によって定義した（表1）。尚、理解障害・表出障害の患者は重複する。

表1 FIMの点数による重症度の定義

理解障害

| FIM点数 | 採点基準 | 重症度 |
|-------|-----------------------------|-----|
| 1 | (25%未満の理解) | 重度 |
| 2 | 1語の質問。yes/noでの返事になる質問を理解できる | |
| 3 | 言葉を強調、短い句を使ってもらえば理解できる | 中等度 |
| 4 | 言葉を選んだ質問は理解できる | |
| 5 | 基本的欲求に関する内容は理解できる | |
| 6 | 複雑・抽象的な内容を理解するが軽度の困難を伴う | 軽度 |
| 7 | 複雑・抽象的な内容を理解できる | |

表出障害

| FIM点数 | 採点基準 | 重症度 |
|-------|-----------------------------|-----|
| 1 | (25%未満の伝達) | 重度 |
| 2 | 語で基本的欲求を伝える。yes/no意思表示のみをする | |
| 3 | 短い句を使って基本的欲求を伝える | 中等度 |
| 4 | 短い文で基本的な日常の要求を伝える | |
| 5 | 基本的欲求に関する内容は伝えられる | |
| 6 | 複雑・抽象的な内容を話すが、軽度の困難を伴う | 軽度 |
| 7 | 複雑・抽象的な内容を話す | |

理解障害のある患者の、平均年齢、平均訓練日数、SLTA（聴く）の合計点の平均について、結果を表2に示す。訓練開始時「軽度」の患者は7名で、平均年齢48.6歳、平均訓練日数82.6日であった。「中等度」は33名で、平均年齢60.9歳、平均訓練日数92.4日、「重度」は11名で、平均年齢63.0歳、平均訓練日数110.5日であった。重症度が重いほど平均年齢が高く、訓練日数も長くなる傾向が認められた。

訓練開始時と訓練終了時のSLTA（聴く）の合計点の平均点の変化をみると（表2）、軽度、中等度、重度とも訓練終了時の平均点が上がっていた。FIM認知項目の理解について訓練開始時と訓練終了時の点数を比較すると（図1）、どの重症度においても終了時に高得点の割合が増えていた。言語機能（SLTA聴く合計点）が改善しただけでなく、日常のコミュニケーション能力（FIM/しているADL）も向上したことがわかる。

表出障害についての結果を表3に示す。「軽度」の患者は6名で、平均年齢は48.7歳、「中等度」は32名、平均年齢60.2歳、「重度」は13名で、平均年齢63.2歳であった。平均訓練日数は、「軽度」78.7日、「中等度」91.8日、「重度」109.8日で、重度の患者は訓練日数も長くなった。

訓練開始時と訓練終了時のSLTA（話す）の合計点の平均点の変化をみると（表3）、「中等度」の患者の平均点は13.4点「重度」の患者の平均点は22.2点上がっており、特に重度の患者では得点が2倍と大きく伸びた。FIM認知項目の表出について訓練開始時と訓練終了時の点数を比較すると（図2）、理解と同様にどの重症度においても終了時に高得点の割合が増えていた。理解だけでなく、表出についても、言語機能の改善とともに日常のコミュニケーション能力（FIM/しているADL）が向上していた。

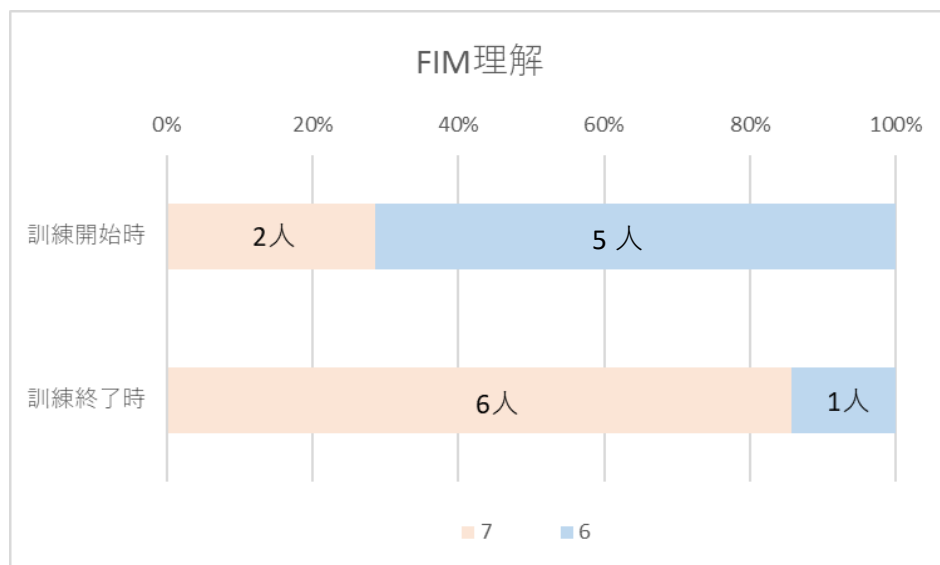
表2 理解障害の重症度別 年齢平均、平均訓練日数、SLTA（聴く）平均点の変化

| | 人数 | 平均年齢 | 平均訓練日数 | SLTA（聴く）合計点 最高40.0点 | |
|-----|-----|-------|--------|---------------------|-------|
| | | | | 訓練開始時 | 訓練終了時 |
| 軽度 | 7名 | 48.6歳 | 82.6日 | 39.5点 | 40点 |
| 中等度 | 33名 | 60.9歳 | 92.4日 | 33.0点 | 38.4点 |
| 重度 | 11名 | 63.0歳 | 110.5日 | 11.9点 | 24.1点 |

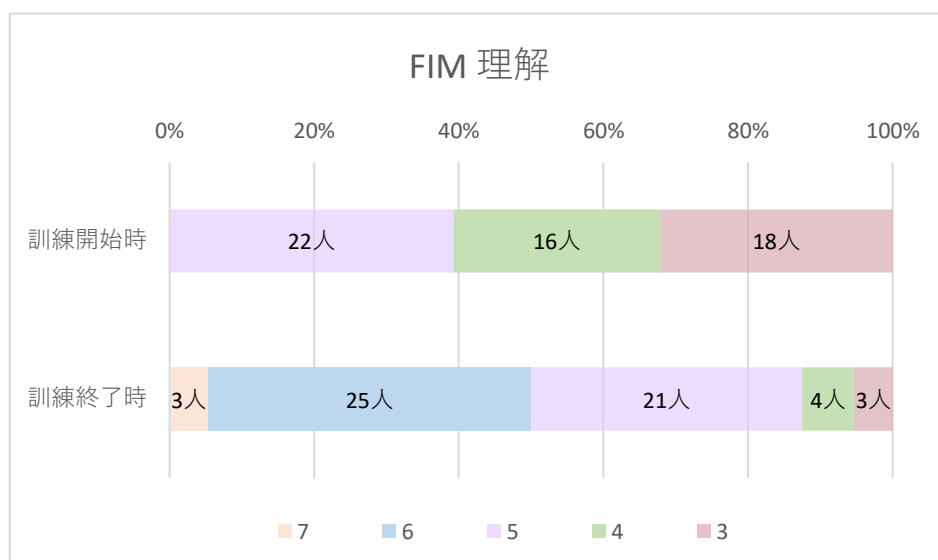
表3 表出障害の重症度別 年齢平均、平均訓練日数、SLTA（話す）平均点の変化

| | 人数 | 平均年齢 | 平均訓練日数 | SLTA（話す）合計点 最高91.0点 | |
|-----|-----|-------|--------|---------------------|-------|
| | | | | 訓練開始時 | 訓練終了時 |
| 軽度 | 6名 | 48.7歳 | 78.7日 | 88.0点 | 90.8点 |
| 中等度 | 32名 | 60.2歳 | 91.8日 | 68.6点 | 82.0点 |
| 重度 | 13名 | 63.2歳 | 109.8日 | 12.3点 | 34.5点 |

図1 失語症理解障害 重症度別 FIM 認知項目（理解）点数
理解軽度 7名



理解中等度 33名



理解重度 11名

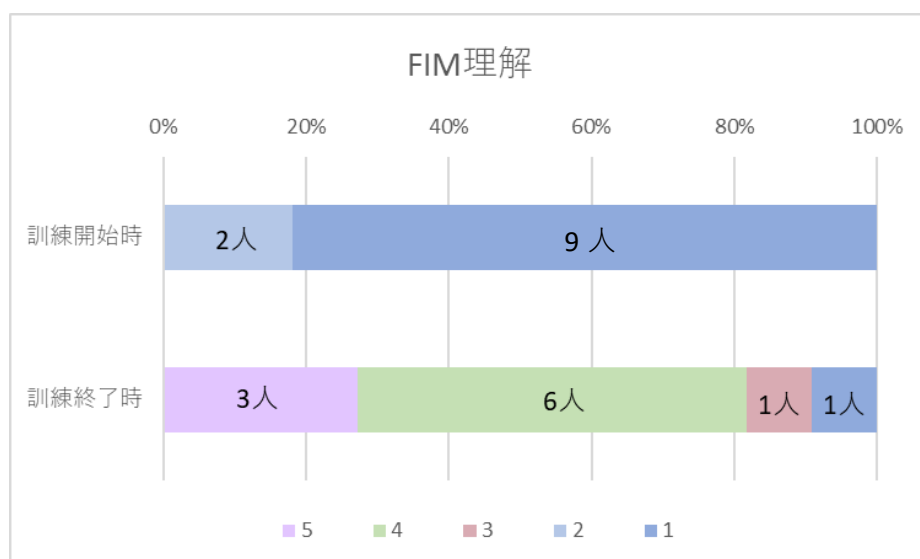
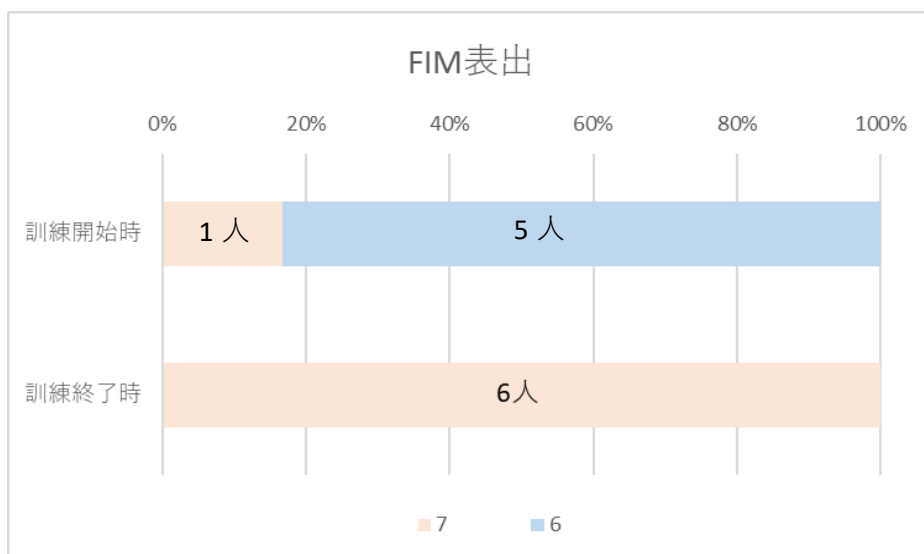
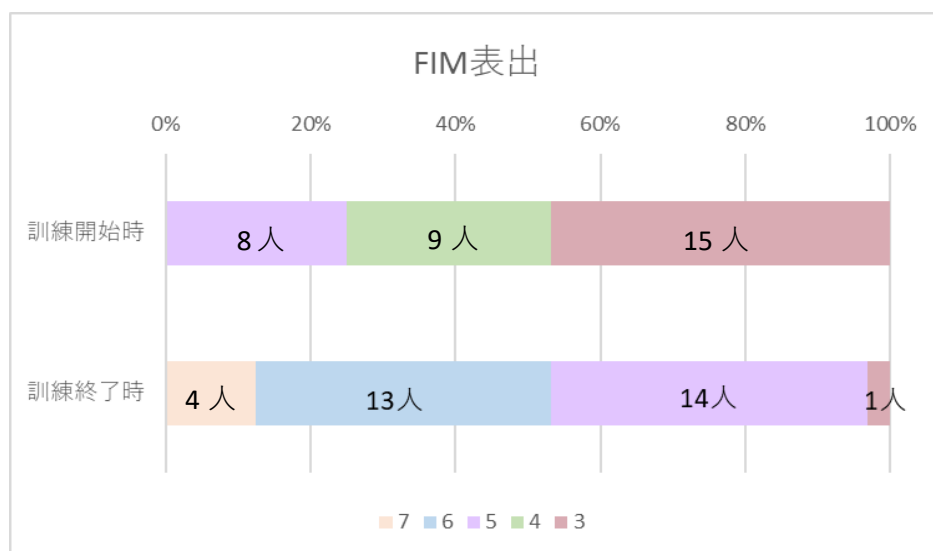


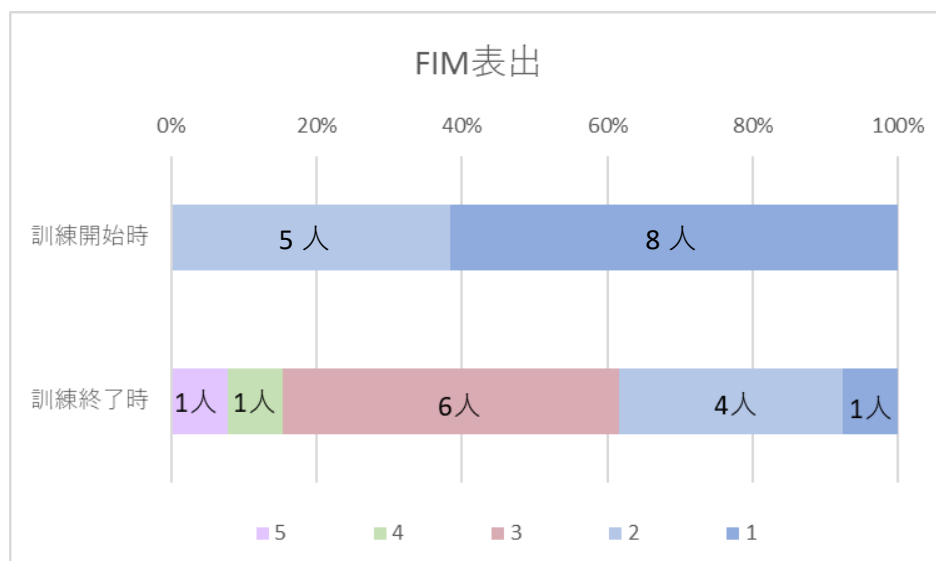
図2 失語症表出障害 重症度別 FIM 認知項目（表出）点数
 発話軽度 6名



発話中等度 32名



発話重度 13名



2. 摂食嚥下障害に対する訓練の効果判定

2024年度にST訓練を実施した摂食嚥下障害患者について、重症度ごとに訓練開始時と訓練終了時の摂食方法・食形態の割合の変化について調べた。

摂食嚥下障害の重症度は訓練開始時の摂食方法によって定義した（表6）。

表6 摂食方法による重症度の定義

| 摂食方法 | 経管・経口 | 食形態 | 重症度 |
|------|---------|--|-----|
| 0 | 経管栄養のみ | — | 重度 |
| 1 | 経管・経口併用 | 嚥下訓練食・嚥下調整食コード1～4・米飯・常菜 | |
| 2 | 経口のみ | 嚥下調整食コード1（ゼリー・ムース・重湯ゼリー） | 中等度 |
| 3 | 経口のみ | 嚥下調整食コード2（ミキサー食・ミキサー酵素粥） | |
| 4 | 経口のみ | 嚥下調整食コード3 （ソフト食1口大に薄いとろみ付き・ミキサー酵素粥） *朝食のみ軟菜刻み薄いとろみ付き | |
| 5 | 経口のみ | 嚥下調整食コード4（ソフト食とろみ無し・全粥・軟飯・米飯） *朝食のみ軟菜1口大とろみ無し | |
| 6 | 経口のみ | 軟菜 | 軽度 |
| 7 | 経口のみ | 常菜 | |

表7 重症度別 平均年齢 平均訓練日数

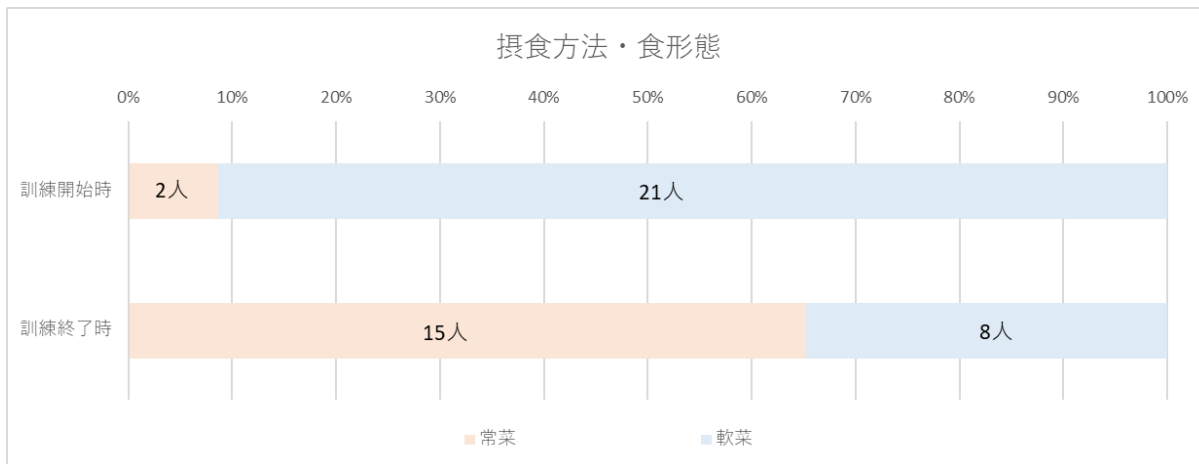
| 重症度 | 人数 | 平均年齢 | 平均訓練日数 |
|-----|-----|-------|--------|
| 軽度 | 23名 | 67.0歳 | 59.3日 |
| 中等度 | 36名 | 76.0歳 | 71.0日 |
| 重度 | 38名 | 68.6歳 | 75.7日 |

重症度別の平均年齢と平均訓練結果を表7に示す。「軽度」の患者は23名で平均年齢は67.0歳、「中等度」は36名で76.0歳、「重度」は38名で68.6歳であった。平均訓練日数は「軽度」59.3日、「中等度」71.0日、「重度」75.7日であった。

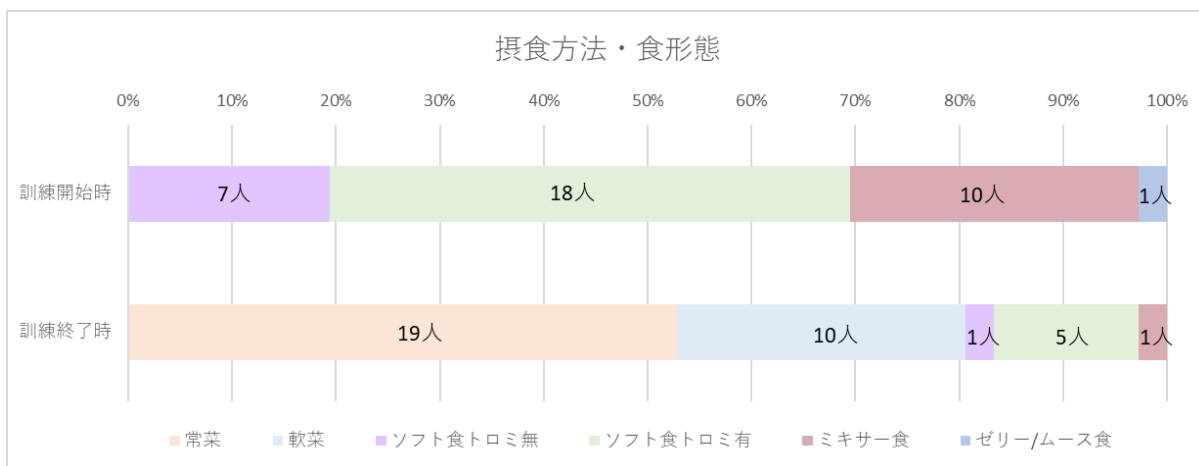
重症度別の訓練開始時と訓練終了時における摂食方法・食形態の変化を図5に示す。「軽度」の患者について、常菜摂取患者は訓練開始時2名→訓練終了時15名に増加した。軟菜摂取患者21名のうち13名が常菜に移行し8名が軟菜にとどまった。「中等度」の患者については、訓練開始時は全員ソフト食以下の食形態であったが、終了時に常菜や軟菜になった人数の割合が80.6%で軽度もしくは障害のないレベルに移行した。「重度」の患者については、訓練開始時の摂取方法が経管併用もしくは経管栄養のみであったのが、訓練終了時には68.4%の患者が経管を離脱して経口摂取のみとなった（図6）。

図5 重症度別 摂食方法・食形態

軽度 23名



中等度 36名



重度 38名

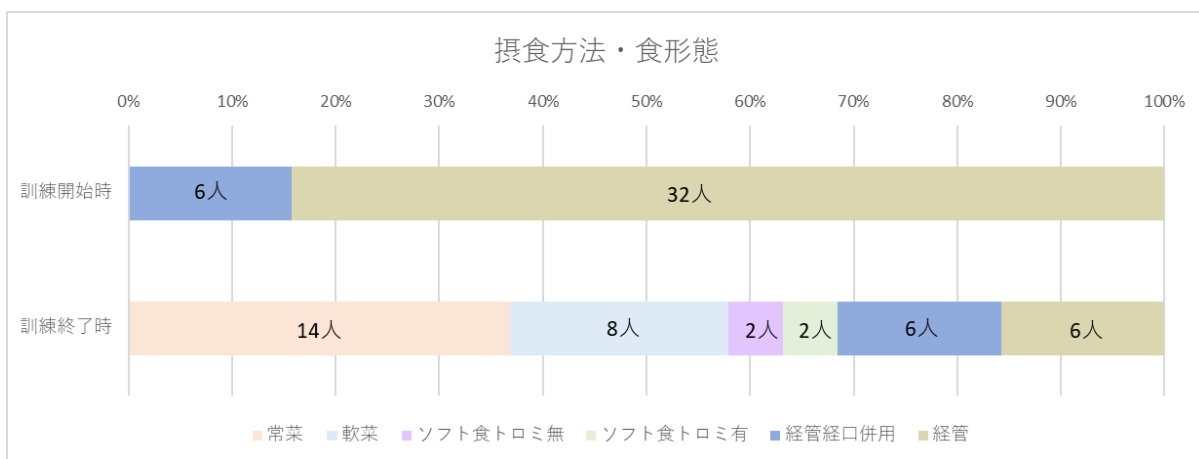
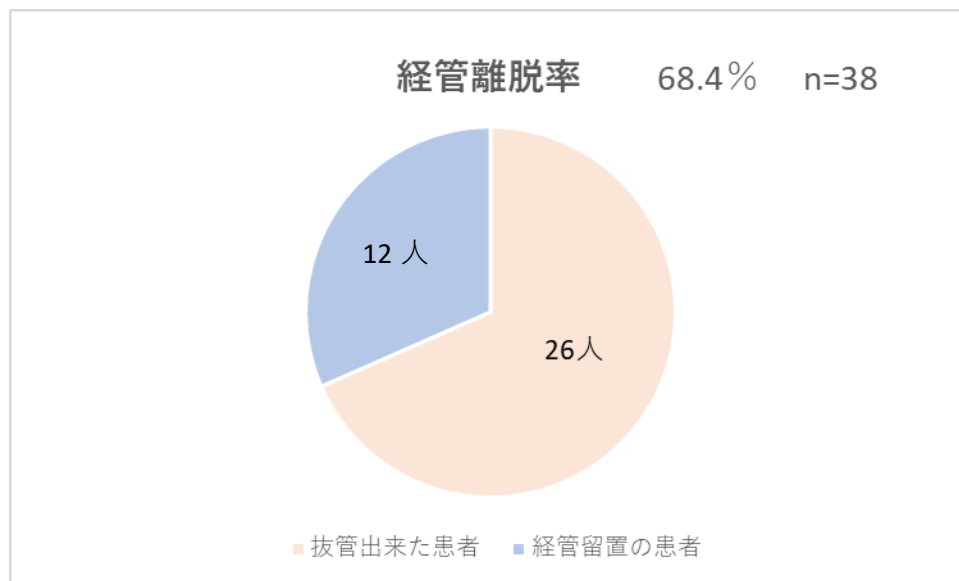


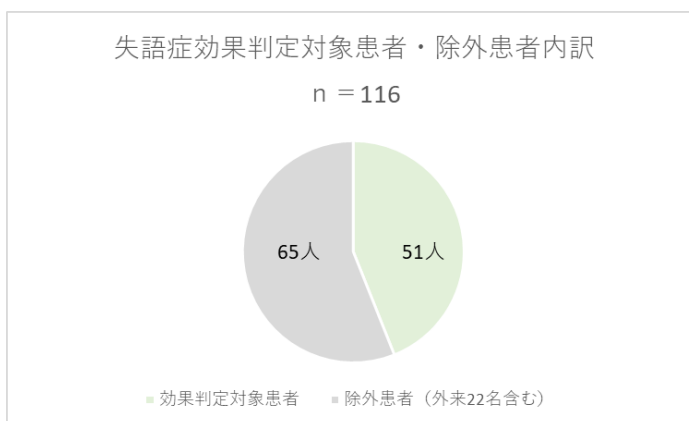
図6 経管栄養離脱出来た患者の割合



別添 障害別効果判定対象患者・除外患者の内訳（2024年度）

患者台帳から抽出する際に、「評価のみで終了」「急な転院」「検査・訓練実施不能」の患者を除外した。障害別の効果判定対象患者・除外患者の内訳は以下の通り。

失語症



摂食嚥下障害

